

# 読むこと領域における内容を的確に捉える力の育成（第一年次）

—文章と図表などを結び付けて読む活動を通して—

長期研究員 神野 杏樹

## 《研究の要旨》

本研究は、「読むこと」領域において「内容を的確に捉える力」を育成することを目指したものである。文章における筆者の主張と、筆者が作品の中で図表を用いた意図を関連させて考えさせることによって、作品の内容と筆者の意図を捉えられるように工夫した。その結果、生徒は筆者の意図を考える視点をもつようになり、実践前よりも作品の内容を正しく捉え、筆者の意図について考えをもつことができるようになった。

## I 研究の趣旨

OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）の結果によると、「テキストから情報を探し出す問題」や、「テキストの質と信ぴょう性を評価する問題」の正答率が低かった。問われていることの根拠を文章中から見付けたり、作品の内容や筆者の意図など客観的に評価したりする授業づくりが求められていると言える。

また、平成30年度全国学力・学習状況調査中学校国語科の「文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉える」の設問における本県生徒の正答率は、全国よりも低かった。特に、「図表などを伴う文章を読む際に、構成や展開などに留意しながら読むこと」に課題が見られた。中学校学習指導要領解説国語編には、指導事項として「文章と図表などを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈すること」とあり、作品の内容の解釈のために、文章と図表などを関連させて考えることが重要であると述べられている。

自身の授業を振り返ってみると、言葉の意味を理解できずに読み飛ばしてしまったり、なぜその言葉がそこに使われているかを考えなかったりして、表面的な理解にとどまっている生徒の姿があった。それは、生徒自らが必要な情報を整理するような授業がなされていなかったためと考える。

以上のことから、その内容を正しく捉え、筆者の意図について考えをもてるような生徒の姿につながる授業改善を行いたいと考えた。そこで、本研究では、「根拠を明確にして作品を読み、書き手の意図を捉える力」のことを「内容を的確に捉える力」と定義し、その力の育成を目指す。その力の育成のために、第一年次は、説明的な文章の学習において、文章と図表などを結び付けて読む活動を意図的に設定していく。生徒が、自らの力で作品を読み解くことができる姿を目指し、研究を進めていきたい。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

「読むこと」領域において、以下の視点から手立てを講じれば「内容を的確に捉える力」を育成することができるであろう。

【視点1】文章と図表などとの対応関係を確認するための工夫

【視点2】筆者の意図を捉えるための工夫

なお、本研究における「図表」とは、概念図や模式図、地図、表、グラフ、写真など、文章以外に用いられている情報のこととする。

### 2 研究内容

本研究は、図1の研究構想に基づいて進めることとする。

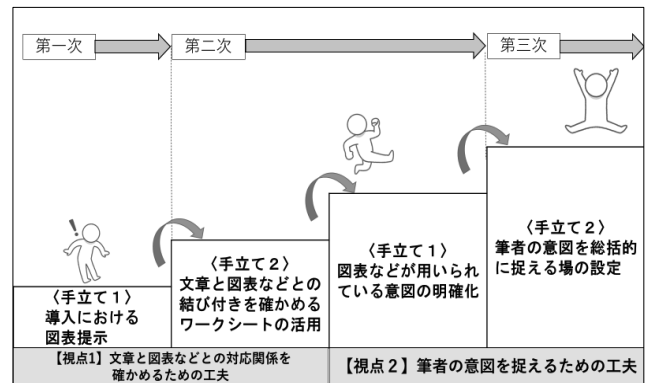


図1 研究構想図

(1) 【視点1】文章と図表などとの対応関係を確認するための工夫

#### ① 〈手立て1〉導入における図表提示

初読の段階において、文章を読む前に作品に用いられている図表を提示し、その図表からどのようなことが文章に書かれているのかを予想した上で作品を読ませる。このことにより、生徒の作品に対する関心を高め、文章と図表の関係に着目して作品を読むことができるようにする。

② 〈手立て2〉文章と図表などとの結び付きを確かめる  
ワークシートの活用

文章と図表の両方から分かることや文章のみに書かれていることを整理するために、文章と図表との結び付きを可視化するワークシートを活用する。このことにより、図表から読み取れることの中で、文章と関連している情報はどのようなことなのかを捉えることができるようにする。

(2) 【視点2】筆者の意図を捉えるための工夫

① 〈手立て1〉図表などが用いられている意図の明確化

図表と文章の結び付きから、なぜ筆者はその図表を用いたのかを考えさせる活動を設定する。それぞれの図表がもっている役割を考えさせたり、筆者が図表を用いて表現しようとしていることを考えさせたりして、作品における図表などが用いられている工夫を捉えられるようにする。

② 〈手立て2〉筆者の意図を総括的に捉える場の設定

筆者はどのように表現の工夫を主張に結び付けているのかを考え、まとめる活動を設定する。また、その結び付いていると考えたことは妥当かどうかについて、まとめたものを交流させる。

3 研究の実際

(1) 授業実践の実際と考察

対象学年 第8学年75名（3学級）  
授業実践Ⅰ「モアイは語る—地球の未来」（7時間）  
授業実践Ⅱ「君は『最後の晩餐』を知っているか」（6時間）

本稿では、授業実践Ⅱの実際を中心に述べる。

レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた「最後の晩餐」には、解剖学・遠近法・明暗法という三つの絵画の科学が用いられている。1999年の「最後の晩餐」の修復作業後、それら絵画の科学がより明確に見えるようになった。500年の時を超え、細部が剥げ落ちても画家が駆使した絵画の科学が見られることから、「芸術は永遠である」と筆者はまとめている。

この教材における生徒に捉えさせたい筆者の主張を「芸術は永遠であること」とした。また、筆者は図表を用いて、絵画の科学を視覚化し、構図や明暗などがどのようなものかを読み手に実感させている。絵画の科学を読み手に理解させ、500年前の画家の技術が21世紀にも見ることができることを実感させるために図表を用いたことを筆者の意図と捉えた。

本単元では、筆者の主張はどのようなことか、図表はどのような意図で用いられているのかを捉えさせること

を目指して授業を展開した。

本実践では、図2のように単元を構想した。

次	時	学習内容	手立て	
			【視点1】	【視点2】
1	1	単元の見通しをもって本文を通読する。	〈手立て1〉	
2	2	「絵画の科学」と修復後の「最後の晩餐」にはどのような特徴があるのかを考える。	〈手立て2〉	
3	3	図表の効果について考える。		〈手立て1〉
4	4	図表の効果から筆者の主張を考える。		〈手立て1〉
5	5	筆者の主張は具体的にどのようなことかについて考えたことを文章にして書く。		〈手立て2〉
6	6	書いたものを交流し、考えを深める。		〈手立て2〉

図2 単元構想図

① 第一次について

ア 【視点1】〈手立て1〉導入における図表提示

まず、教科書の本文を読む前に、図3に示した図表①～④のそれぞれについて気が付いたことを付箋に書き出した。

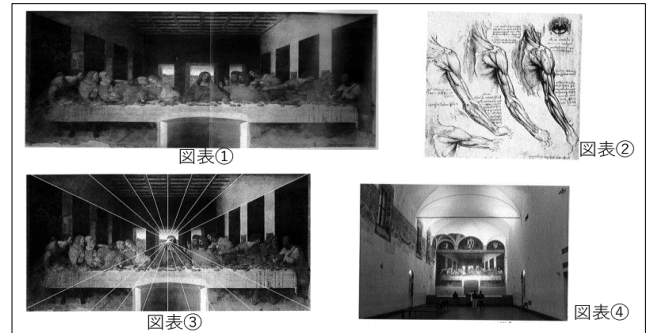


図3 作品中に用いられている図表

次に、各自で書いた付箋をグループで共有し、図表について考えたことをワークシートに記述した。

生徒Aは図表③についての疑問をワークシートに記述した。その後、その疑問を解決するために、図表③に関連した文章を意識しながら作品を読み、分かったことをワークシートにまとめた。この学習によって、生徒Aは図表からの疑問をきっかけとして、必要感をもって文章を読むことができた。また、図表③と関連した文章とを合わせて「遠近法を用いて、計算して絵を描いたこと」について理解し、文章と図表の関係に着目して読むことができた（図4）。

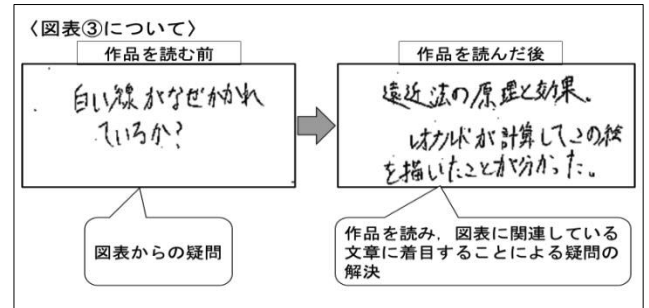


図4 図表に対する疑問の解決

② 第二次について

ア 【視点1】〈手立て2〉文章と図表などの結び付きを確かめるワークシートの活用

2時目は、文章と図表との結び付きを把握させるためにワークシートを用いた。結び付きを整理することができるように、上段には教科書の文章を書かせ、下段には結び付く図表を選び貼付させた。生徒Bは、「明暗法」について、2種類の図表が関連していることに気づき、図表③と④を選んだ。文章と図表のどの部分が結び付いているのかについて、線を引いたり丸を付けたりして可視化することで、関係性を捉えやすくなることができた(図5)。

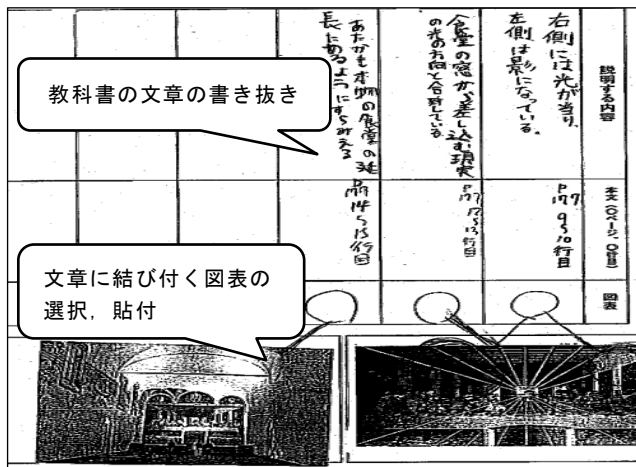


図5 文章と図表の結び付きの可視化

イ 【視点2】〈手立て1〉図表などが用いられている意図の明確化

3時目に、図表①～④の4つの図表について、文章と図表がどのように結び付いているのか整理したことを活用しながら、それぞれの図表が用いられた意図を考えた。

それぞれの図表が用いられた意図を考えた後、より広い視点で文章を読めるようにするために、他にその図表と関係のある文章はないかを確かめた。

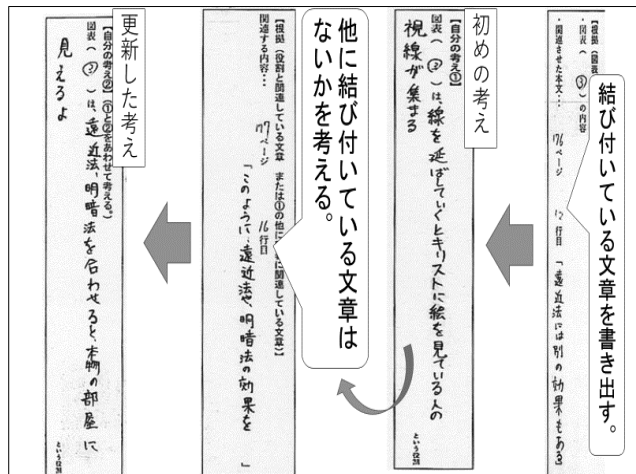


図6 文章との結び付きから考えた意図

図表③について、「遠近法の効果により、視線がキリストに集まることを分かりやすくしている」と考えていた生徒Cは、この活動の後、同じページに「明暗法」に関する記述があることに気づき、図表③を用いることによって、「遠近法と明暗法の二つを組み合わせると本物の部屋に見えること」をより明確に伝えようとしている筆者の意図をまとめることができた(図6)。

③ 第三次について

ア 【視点2】〈手立て2〉筆者の意図を総括的に捉える場の設定

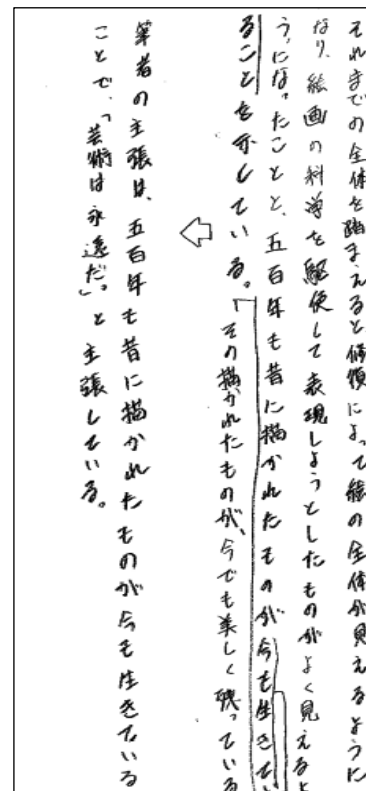


図7 主張と意図の結び付き

5時目は、前時までに考えた図表が用いられた意図を、総括的に捉える活動を行った。生徒Dは、それぞれの図表の役割を「絵画の科学を駆使して表現しようとしたものがよく見えるようになったことと、五百年も昔に描かれたものが今も生きていることを示している」とまとめた。そのことは「芸術は永遠だ」という主張につながっていると考えることができた。

その後、書いたものを

読み合う時間を設定した。その中で自分にはなかった気づきや根拠をメモし、改めて筆者の主張を捉え直した。生徒Dは、やりとりの中で「教科書の文章にもあるが、絵が今でも生きているとはどういうことか」「今でも残っているということではないか」という発言を参考に、「今も生きているとは、その描かれたものが、今でも美しく残っている」と書き足した。このことにより、文章中の抽象的な言葉を自分の言葉で説明することができた(図7)。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 意識調査から

実践の前後でどのように生徒の意識が変化しているかアンケートを実施、分析した。意識調査の結果を見ると、「説明文を読むときに重要だと思うことは何か」とい

う質問に対して、事前では「語句の意味を理解する」ことや「漢字を読んだり書いたりする」ことの知識及び技能面を重視していたが、事後のアンケートでは、「文章と図や表を結び付けて関係性を考える」項目と、「筆者の主張に対して自分の考えをもつ」項目が増加した（図8）。

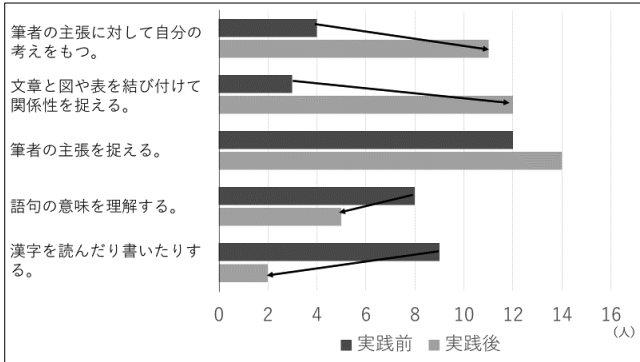


図8 意識調査の結果

その理由を見ると、「文章と図表の結び付きを考えると、いろいろなことにつなげて考えることができるから」や「筆者がどうしてそう考えたのかを自分で考えることが文章を正しく読むことにつながるから」という記述があった。また、事前と事後のどちらも多くの生徒が「筆者の主張を捉える」項目を選択しているが、事後には「筆者の主張を捉えて、なぜそう言えるのかを探るとより深く分かるから」という記述が見られた。このことから、生徒は筆者の主張を捉え、それを伝えるためにどのような意図をもって文章が構成されているのかを考える視点をもつようになったことが分かる。

## (2) 事前、事後テストによる分析



図9 事後テスト

「内容を正しく捉え、書き手の意図を考

えていること」の2つを観点とし、各3点満点とした。事前と事後では、0～2点の生徒の人数が減少し、3～6点の生徒の人数が増加した（図10）。観点別に見ると、「内容を正しく捉えていること」の観点では、正しく捉えられた生徒が21名から33名に増加し、「内容を基に

して写真を用いた筆者の意図を考えていること」の観点では、内容を基にして考えたことを記述できた生徒が事前では11名だったのに対し、事後では30名に増加した（図11）。

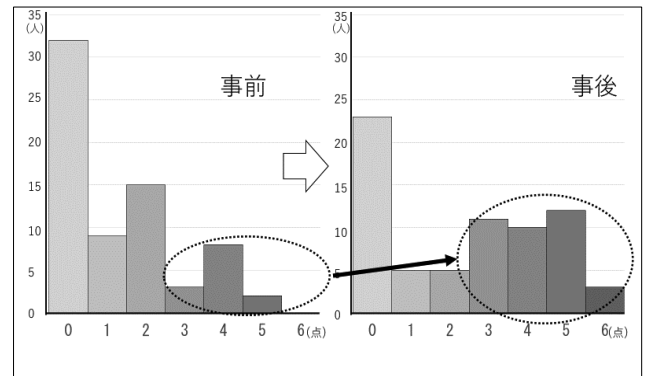


図10 事前・事後テストの結果

	内容		書き手の意図	
	事前	事後	事前	事後
3点	4	14	0	9
2点	17	19	11	21
1点	14	12	8	5
0点	33	23	49	33
採点基準	3点：内容を正しく捉えている。 2点：内容を捉えているが、記述に不足がある。 1点：記述しているが、誤りがある。 0点：記述なし。		3点：写真を用いた意図を書いている。 2点：写真を用いた意図を書いているが、記述に不足がある。 1点：記述しているが、誤りがある。 0点：記述なし。	

図11 事前・事後テストの観点別結果

## 2 今後の課題

生徒の事後テストの解答内容を詳しく見ると、写真が用いられた意図について、キーワードだけで理解してしまい、誤った捉え方をしている記述が見られた。これは、部分的なキーワードと図表との関係性を考えているが、文章全体における筆者の主張と図表の関係性を捉えられていないことを示していると考えられる。今回の実践では、それぞれの図表と関連している文章を部分的に抜き出し、その意図について考えたが、図表が用いられた意図と筆者の主張との関連を考える手立てが不十分であったことが今後の課題として挙げられる。

このことから、作品を読む際に、生徒に「書き手の伝えたいことに、これらの図表は必要か」等の批判的な視点をもたせることで、より筆者の主張に関連した筆者の意図を捉えさせることができるのではないかと考えた。第二年次においては、生徒に批判的な視点をもたせる手立てを講じることで、「的確に内容を捉える」生徒の姿を目指していきたい。